



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本人の宗教意識の諸相と主観的ウェルビーイング：計量的データ分析と検討〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	清水, 香基
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14286号
Issue Date	2020-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80607
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Koki_Shimizu_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 清水 香基

	主査	教授	櫻井	義秀
審査委員	副査	教授	平澤	和司
	副査	准教授	宮嶋	俊一

学位論文題名

日本人の宗教意識の諸相と主観的ウェルビーイング

：計量的データ分析と検討

・当該研究領域における本論文の研究成果

OECD の Better Life Initiative やコロンビア大学による世界幸福感調査によれば、日本人の健康認知度や主観的幸福感は OECD でも低位水準にあり、世界でも 50 位前後である。経済水準や医療の充実が必ずしも人々の幸福につながっていない現状において、日本人の幸福感を構成する心理的・文化的特性を理解する基礎的研究が必要である。世界中で進められている主観的幸福感の研究では、宗教意識や宗教行動が身体や精神面での健康、社会関係の維持、ストレスの緩和や認知構造の転換、ポジティブな生活態度や習慣の維持に役立っていることが報告されているが、日本では、従来、宗教が心理や認知的特性、生活態度構成の重要なファクターとして扱われてこなかった。

その背景的理由として、一つは日本が世界でも有数の世俗化社会であり、宗教団体に自覚的に所属し、信仰を持つという人々が少数であり、檀家・氏子を除けば 10% に満たないこと。もう一つは、従来、日本の宗教社会学において日本人の宗教性を把握する際に、キリスト教・イスラーム型の測定尺度である宗教団体への所属と信仰の熱心さがそのまま用いられており、無意識的・慣習的な宗教意識や行動、すなわち先祖祭祀や地域の寺社における祭礼参加といった儀礼や慣行を適切に尺度化して測定する研究が進められてこなかったことがあげられる。

本研究はこのような研究状況を進展させるためになされたパイロット型の研究である。

論文は二部構成であり、前半では宗教意識と主観的幸福感（SWB）に関する先行研究を整理するとともに、世界価値観調査や ISSP 国際比較調査といった既存データを用いて伝統的な宗教意識の衰退（世俗化）を明らかにし、同時に NHK 放送文化研究所の「日本人の宗教意識」の時系列データの世代間比較を行い、全世代において伝統的な宗教行動が衰退する一方で、若い世代には「必ずしも特定の神や仏を必要とはしないが、超自然的（神秘的）な秩序志向の意識—スピリチュアルな感覚」が出現しつつあることが確認された。後半では、2017 年 7 月に調査会社に委託して実施した「宗教と主観的ウェルビーイング（SWB）に関する調査」の探索的データ分析を通して、①「日本人の宗教意識」の類型の提案および宗教意識を測定する尺度の開発、②個々人の宗教意識のあり方が個人の主観的ウェルビーイングに与える影響の検討を行なった。

本研究の学術的貢献は三点にまとめられる。

第一に、従来、日本人の宗教意識や行動はウェルビーイングとは関連しないという研究が複数あったが、これらの知見を覆した。今回の総合的社会調査に基づけば、健康状態やメンタルな心理変数ほどではないが、「伝統・慣習的な側面」「制度宗教的な側面」「スピリチュアルな側面」の 3 因子から構成される日本人の宗教意識がウェルビーイングに寄与している（前二つはポジティブ、最後はネガティブな効果）ことが明らかになった。また、宗教団体への所属（檀家・氏子を含む）によって主観的幸福感は変わらないのだが、宗教団体に所属して宗教心を保持している人が、所属しているにもかかわらず宗教心がない人より有意に SWB が高いこと、郡部では宗教団体への所属が近隣への信頼感を高め、かつ SWB も高めていることなど、細かな知見も得られている。

第二に、国際調査で実施された「宗教心の強さ」「宗教団体への所属」に替わるアジア型宗教性や日本人の宗教性として潜在変数を構築し、主観的幸福感や生活満足度を説明する「機能的等価」な変数の探索的研究を行ったことである。これも従来は「宗教的心は大事である」という認知・信念が、生活態度や社会意識に影響を与えることが指摘されていたが、「墓参りの習慣」「伝統的な信心」「現世ご利益志向」「スピリチュアリティ（個人化した宗教）」「制度的な宗教意識」などもまた広い意味で「宗教性」に相当する効果を有すること、すなわち機能的等価であることが示された。

第三に、日本の宗教社会学は圧倒的に事例調査やフィールドワークが多く、総合的社会調査データの計量分析が少ない。その結果、無宗教無信仰を自認する多数派の日本人における「宗教意識」の尺度化や分析手法は看過されてきたと言える。本研究では、通常の計量分析に加えて潜在クラス分析や最小空間分析などにより、宗教意識の構造や主観的幸福感/生活満足度の構成をわかりやすく示したことも研究成果に加えられる。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文の口頭試問において申請者は審査委員からの質問におおむね適切に回答したが、検討の余地があることも明らかになった。

第一に、国際調査の二次分析や国内調査の分析においても、「宗教意識」を構築する尺度が認知的に弁別でき、観察可能な事柄に留まっており、「感情」や認知変容を伴う「経験」などが必ずしも把握されていないのではないかという本質的な問いが残されている。また、宗教団体に所属することと他の社会団体に所属することで得られる主観的幸福感の差異について分析上工夫の余地があった。

第二に、SWB に宗教意識が寄与するとしても、日本では依然としてヨーロッパ価値観調査や北米の調査と異なり、寄与率が極めて低い。これが世俗化の影響か、宗教意識を測定する尺度の感度の問題として残されているのか、さらに考察が必要ではないかというものである。

第三に、計量分析の結果を解釈する際に、意識や行為の効果がどう現れるのかという経路に関して、さらに因果的推論を進める分析が可能なのではないかといった点もあげられた。

これらの諸点に関して、申請者は調査項目の設計やデータの構造上の問題を踏まえて、主査・副査の質問やコメントにも自身の考えに基づき適切に応答できていた。したがって、上記の三点は今後の課題として適切に発展的な研究が進められることが確認できた。

以上、本論文は、主観的幸福感に影響を与える宗教意識の実証的研究として学術的貢献が相応にあるものと認められ、審査委員会では全員一致で、本論文提出者が博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいとの結論に達した。